

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第461号 平成24年12月21日

## イライラするカタカナ語

最近のカタカナ語の乱用は目に余ります。

つい先日総選挙が終わったところですが、選挙といえば「マニフェスト」という言葉が飛び交いました。最近、この「マニフェスト」という言葉にもようやく耳に馴染んで来たなと思っていたのですが、今は「アジェンダ」といわないと、時代遅れの感じがしなくもありません。

私などは、「マニフェスト」は政党公約、「アジェンダ」は行動計画、あるいは検討課題といってくれば済む事なのにと考えていますので、カタカナ語の氾濫には「啞然だ！」というところです。

更に大変なのは、IT用語です。「アドオン」「クラウド」「デバイス」等々、正直お手上げ状態です。外来語を必死になって日本語に置き換える努力を重ねた明治の人達は、立派だったといわざるを得ません。もっとも、今の若い方々にとっては、カタカナ語の氾濫といっても何の支障もないのかも知れません。

この悩ましいカタカナ語について、朝日新聞が面白い調査をしています。

それは、朝日新聞がデジタル会員に登録している方々を対象に行ったアンケート調査の結果で、国立国語研究所が2006年にまとめた「外来語言い換え」に取り上げた外来語をベースに65語のリストを作成し、「注釈がないとイラつく」「日本語で言い換えてほしい」言葉を最大15語まで選んでもらったもの（12月8日付朝日新聞）だそうで、その結果イライラ度1位は「コンピテンシー」、以下

2位「インスタレーション」

3位「インキュベーション」

4位「コモディティ」

5位「ダイバーシティ」

と続いています。

実は、全部で20語示されているのですが、悲しいかな、その意味はほとんど分かりません。聞いたことはあるけれど、正確に意味を説明する事が難しい、だからイライラ感が募ります。

「セーター」や「シャツ」といった日本語に訳しにくいものならともかく、普通に訳せるものまで、わざわざ聞きなれないカタカナ語に置き換えるという風潮が世

にはびこっている（超訳「カタカナ語」辞典から。）と、私も実感していますが、それは一体何故なのでしょう。

何といたっても日本人は外国語に弱いですから、例えば、話し合っている最中に相手にカタカナ語を使われると、何となく反論し難いという経験はありませんか。逆にいうと、カタカナ語は相手を煙に巻くには打って付けかも知れません。

もっとも、カタカナ語を上手に使っている人を見ると如何にも専門家然としていてカッコ良いなと思います。勿論、カタカナ語を使えばカッコ良く見えるのではなくて、カッコ良い人が使うからカタカナ語も生きて来るので、この事を勘違いしてはいけないと思うのですが・・・。

さて、先程のイライラ度1位から5位のカタカナ語の意味を、超訳「カタカナ語」辞典から簡単に紹介しましょう。

1位の「コンピテンシー」は、「デキる人の行動パターン」

2位の「インスタレーション」は、「空間を利用したアート」

3位の「インキュベーション」は、「社会を大きく変える超革新的なもの」

4位の「コモディティ」は、「泥沼の価格競争」

5位の「ダイバーシティ」は、「一人一人ちがうからこそすばらしい」

というのですが、今更ですが、そういう事だったのかと再認識する思いです。

私は、カタカナ語が苦手ですが、カタカナ語を全否定するつもりもありません。ただ気を付けなければならない事は、カタカナ語についての理解が人によって必ずしも同じではないという事です。カタカナ語について、話し手と聞き手双方の理解が曖昧なままでは、日本人同士で議論がかみ合わない、あるいは意思疎通がきちんと出来ない状況が生じてしまいます。お互い分かったつもりになっている、そうした齟齬があちこちで起こっているのではないかと懸念します。

私達は、折角、子子孫孫受け継いできた日本語という素晴らしい言葉を持っているのですから、互いのコミュニケーション能力を高める為にも、カタカナ語の乱用は極力慎み、もっともっと日本語を大切に、日本語を話すことに磨きを掛けるべきではないでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）